

日本の教育では、小中高の各段階で教えなければならぬ最低限の内容などが文部科学省によって決められている。それが学習指導要領である。

子供たちが手にする教科書はこれを基準に編集されている。社会の変化に対応して約10年ごとに改定するのが基本である。今回の改定は小中学校が昨年、高等学校が今年3月に告示され、その詳細を記した教員向け冊子解説書も7月でそろい踏みした。皆良（まが）く承知のように、選挙権年齢が18歳に引き下げられ、センター試験に代わる大学入学者選抜等の高大接続改革が実施される状況での改定は重要な意義を有し、注目に値する。

「日本の教育方針は、文部科

学省のお役人が都合の良いように作っている」と勘違いされている方は、意外と多い。実のところ、学習指導要領は文部科学大臣の諮問に応じ、重要事項を調査審議し、大臣に意見を述べる中央教育審議会の答申に沿って作成される。審議会委員は、国民の代表的な性格を有しており、教育関係者はかりでなく、幅広い分野から選出されている。オーバーに言えば、オールジャパンで、日本の未来を背負う子供たちの育成について考えているのである。

今の子供たちやこれから生まれてくる子供たちが大人になるとき、厳しい挑戦の時代を迎える。今回の改定は、子供たちを

## 名古屋経済大学法学部准教授 高橋勝也



生涯にわたって探究を深める未来の創り手として社会に送り出していこうとする特徴がある。そのため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進していくのである。私たちの時代の授業は、一方的に先生が話をして、黙って黒板を書き写すものが主流であった。これからは、そんな授業から脱皮し、教室内で活発に意見交換がなされ、思考力や判断力を育成して表現力を豊かにしていくこ

〈たかはし・かつや〉鹿児島県と東京都で公立学校教諭を歴任。総務省主権者教育アドバイザー。NHK高校講座「現代社会」番組講師。

らの教室をのぞきに行こう！子供たちは、じっと先生の指示を待つばかりでなく、自ら積極的に主体的な姿勢で、教室にいるたくさんのクラスメートの対話と協調を積み重ね、自らの考えを表現していくはずである。まさに主体的・対話的で深い学びを体得していくのである。子供たちを見守っていくとき、私たち大人がひとつ心得ておくべきものがある。文科省の課長の言葉を借りれば、「出藍

# 「出藍の誉れ」大歓迎だ

とが目指されていくのである。この教育の完成を待ちわびなければならぬのは、社会の前線に立つ私たち大人である。深刻な少子高齢化の中、飛躍的に進化を遂げる人工知能(AI)に頼らざるを得ない社会の到来は近い。しかし、AIは与えられた目的に向かって作業処理を行っていく存在である。よって、このAIに与える目的に、美しさや正しさを与えて、より良いものを生み出させていくのは、人間しかできないのである。またAIでさえ、できないことがあったとき、本領を発揮するのが、新しい教育観によって育まれた若者たちなのである。ぜひ今の大人たちは、これか

の誉れである。弟子が師匠を超えて優れていくことを意味する格言だが、本音のところ、自らの衰えや寂しさも感じるかもしれない。が、大歓迎すべきなのである。このような若者が、私たちの生きる社会を牽引していくてくれるのだから。これからヤマ場を迎える教育改革は順風満帆でもない。そんな中、学校の先生方は今日も自宅にまで仕事を持ち帰り、明日の子供たちの笑顔を引き出すために、準備に向かっていて。社会に求められる人材育成を、学校だけでやらせていては、未来で輝く若者は育たない。一人一人の大人が、何ができるかを考える時が来ている。

## ■ 麻乱答 ■